『國民新報』1939年7月9日

-主張-　事變二周年　まだまだ不足の緊張感

　二の七七は、一のとと、そしてしいとによつてせられた[。]それはにきので、のどがによりされ[、]や二たるとのにつてのなのである。ひかねばならぬこのであり、たさねばならぬである。しそれは「一」によつてのみせられるのだ。のにつもたぬもて一につのであれとが々にびける[、]そのにの々はをたにしたのである。

にり々はのをもたざるをぬ。々はこののためにりにもであつたといふだ。々のがからにてなかつたのは、いまだのをないのとしてはむをないにしても、のだけでももつともつとをすべきであつた。これしきのやそのので、やのからされたりされたりしたことはにていとはざるをない。もつともつともしよう。もつともつともしよう。もつともつとしてをしもはう、もしよう。のもけよう[。]もつともつと『いくさのにはにつ』となつてやのおにもとうととがにった々である。

これはとしてのなるであり、のであるが、にがとがのにひをすとき々は一をげてののにさゞるをなくなる。がのものも、一にかゝつての一にあるからだ。しものにれなばとするに、々はをじないではないか。されば々はにどにもいさをるものであるが々のなるととは、ずやこのをつてりあるであらう。が々にする一のものは、にこの『るき』なのだ。はかながにてるにぎないが、のがをつてをるもくはないことであらう。はくば三のをしてもつとととのいたらしめんことを。